

ハチドリの物語

これは南米エクアドルの先住民に伝わるハチドリの物語。

アマゾンの森が燃え、動物たちはわれ先に逃げ出した。大きな動物も小さな動物もみんな争って逃げ出したんだ。

でも体長7センチほどのハチドリだけは、燃えている森の上を行ったり来たり、嘴（くちばし）で水のしずくを一滴ずつ運んでは、火の上にかけた。本当に、はちどりは何度も何度も行っては戻り、行っては戻りして水のしずくを運んだんだ。動物たちがそんなハチドリの空しい努力を見て、こう言った。

「はちどり、おまえはアホか。そんなことをして何になるんだ。よう聞け、お前の小さな嘴で水を運んだらしたって、この火事を消せるわけないやろ。そこんところ、お前はちっともわかったらんのと違うか」

これを聞いたハチドリは「私は私にできることをしているだけです」と、答えたとさ。どっとはらい。

これだけだと只の昔話、説話なんですが、現代的な問題意識を含んだ物語として成立するためには、やはり人間的な葛藤がいる。この場合、主人公はやはりハチドリです。つまり....

次第にこのむなしい行為に、ハチドリは悩むことになる。

「こんなことをして何になるんだ。おれは何をしているんだ。この間はかっこよく「私は私にできることをしているだけです」なんて言ったけど、おれの力では、いくら努力したって情勢は悪化するばかりではないか。この大きな自然の力に対しては、おれのようなちっぽけな力なんて何の意味もないんだ。おお、神よ私はどうしたらいいのですか。彼らのように私はアホなののでしょうか。私はなんのために生きていますか。私という存在は何の意味があるのでしょうか」するとこれを聞かれた神はこう言われた。

「この世に生きていてもので、意味のないものなんてひとつもないのさ。ほら、道端の石にだってちゃんと存在している理由と価値があるんだ。望みを持ちなさい。未来を信じなさい。ほら、力が湧いてくるだろう」

うーん。違うなあ。ハチドリの葛藤も必要だけど、もっと人間は強くて賢いんだ。未来を開くためには、周りの動物たちはハチドリを見てこう言うんだ。

「おい、あんな小さなハチドリでさえ、自分の力で火を消そうとしているじゃないか。俺たちみんなで力を合わせてやれば、出来ないことはないはずだ。さあ、象もくじらもみんな協力して火を消そうじゃないか」

ということで、みんなで懸命にやったため、さしもの森の火も消し止められたんだとさ。どっとはらい。